天台智顗の教学における化法四教の位置

宮崎公宏

天台智顗の教学の中の化法四教はあらゆる経論についてその教えを内容の浅深から、蔵教（三蔵教）・通教・別教・円教の四つの教に分類するものである。この化法四教が確立されてゆく経緯とその扱いについて、先学の研究[1]を踏まえつつ、調査、検討を試みた。

まず、撰述の調査であるが、化法四教そのものの単語に加えて、化法四教に対して相即の関係にある四種四諦[2]と三観を加えた三つの観点からもそれぞれ調査を行った。智顗の教学は天台隠棲後の後期にはほぼ完成した内容となっているため、その形成過程を追うためには前期の撰述の調査が必要となる。調査の結果、化法四教に関しては、『法界次第初門』にのみ三蔵の教門、三蔵教、通教、別教、円教の単語が見られるが具体的な記述はなく、通教、別教、円教はただその語を二種の四諦に対応させているのみである。四種四諦に関しては、変遷を追っていくと、『次第禅門』では単なる四諦十二因縁の四諦（声聞の四諦）であったが、『法界次第初門』においては有作の四諦・無作の四諦の二種の四諦があらわれている。生滅・無生・無量・無作の四種四諦については見出すことはできなかった。三観に関しては、『次第禅門』の時点で、従仮入空観、従空入仮観、空仮一心観の記述があり、『小止観』においては、従仮入空観、従空入仮観、中道第一義観、中道正観についての記述を見ることができる。

これらの結果を踏まえて検討を行うと、智顗の前期時代の撰述において、化法四教については『法界次第初門』においてその語が見受けられるが、四諦との対応などを見るとまだ明確な形となってはいなかったようである。

四種四諦については二種の四諦のみの記述にとどまっている。後期撰述における四種四諦についての説明には、『涅槃経』聖行品をもとにしたとの記述があり、『涅槃経』からの引用も数多い。それに対して、前期の撰述には殆ど引用されていないことから、智顗が『涅槃経』に注目するようになったことがきっかけなのであろう。また、後期の撰述においては、四種四諦について『中論』の四諦品の偈が蔵通別円に対応することが述べられているが、『小止観』において『中論』の偈を引用している中では四句それぞれについての対応は語られておらず、これも後期に至るまでに除々に発展させていったと見るべきであろう。

三観に関しては、最初期の頃から三種の観が述べられており、ある程度概念は固まっていた様に思われる。『小止観』において『瓔珞経』からの引用があり、後期の撰述においても同様に『瓔珞経』にある三観を元にする旨の記述があるため、三観としてはここにその緒をみることができると思われる。

ここで、三観を化法の四教と対応させるためには従仮入空観を析仮入空観、体仮入空観に分割して考えることが必要となるが、前期の撰述においては内容的には当てはまる部分もあったものの単語として見出すことはできなかった。一方、これを四教と対応させるために従仮入空観を析仮入空観と体仮入空観に分ける必要がある。『法華玄義』、『摩訶止観』においては既に解釈されてはいるが、析仮入空のように一語化されているのは『大本四教義』と『三観義』および『維摩玄疏』など最晩年の維摩疏の撰述においてである。

この三観との対応にもあるように、体系化するに当たっては、通教が最も困難であったと推察される。通教には明確に一対一で対応する経がある訳ではなく、経中には通教があれば必ず別教が存在するという関係である。その概念としては既に初期の撰述に記述がみられるが、ここで

一番問題となるのは当時の教判である。智顗に至るまでの諸師の教判はいずれも教と経典が一対一の関係になっており、一つの経典に二つ以上の教を対応させたものは無い。経典と教を分けて考えるという事が画期的といってよいことだったと思われる。これを発展させれば一つの経典に蔵通別円全ての教が存在していても全く問題はない。この、経論の内容を合理的に分類できるとの結論が化法四教なのであろう。

註

(1)代表的なものとして『天台止観の研究』(関口真大)、『天台大師の研究』(佐藤哲英)が挙げられる。

(2)生滅四諦・無生四諦・無量四諦・無作四諦の四種の四諦。それぞれ蔵教・通教・別教・円教に対応する。

(大学院仏教学研究科仏教学専攻博士後期課程)